

「にんじん」の訳稿を終へて

岸田國士

青空文庫

(此の一文は考ふるところあつて特に挿込となす)

この翻訳は全く自分の道楽にやつた仕事だと云つていゝ。初めはのろのろ、しまいには大速度で、足かけ五年かゝつた。創作月刊、文芸春秋、作品、新科学的文芸、詩・現実、新青年、改造等の諸雑誌に少しづゝ発表した。

最初に断つておきたいことは、この小説を作者自身が脚色して同じ題の戯曲にした、それを、畏友山田珠樹君がもう七八年前、「赤毛」といふ題で翻訳をし、これが相当評判になつて、今日ルナルの「ポアル・ド・キヤロツト」は「赤毛」といふ訳名で通つてゐるかも知れないことだ。僕は、「赤毛」といふ題も結構であると思ふが、元來訳しにくい原名であるから、山田君の「赤毛」は山田君の専売にしておいた方がよいと思ひ、故ら異を樹てる意味でなく、自分は自分の流儀に訳してみたまでである。原名を直訳すれば「人参色の毛」である。

初版の刊行は千八百九十四年、作者三十一歳の時である。

この小説を書き出したのは千八百九十年で、一章づゝ次ぎ次ぎに雑誌や新聞へのせた。

また、ある部分は、他の形式で本にしたこともある。初版には「壺」「パンのかげら」「髪の毛」「自分の意見」「書簡」等の項目はまだ加はつてゐない。従つて、千八百九十七年版以後のものが、現在の完成した形である。

戯曲としては、千九百年三月、アントワヌ座でこれを上演した。

映画になつたのは無論ずつと後のことだが、最近デュヴィヴィエの監督で発声映画になり、この秋日本でも封切される筈だ。

「にんじん」が作者自身の肖像であることは、作者の日記を見ればわかる。

日記の中で、彼は、この作品に少しばかり響め面を見せてゐる。ルピツク夫人の老い朽ちる有様を眼のあたり見る「にんじん」四十歳の心境であらう。

ルナルは、この書を、その二人の子供、息子フアンテックと娘バイイ（共に愛称）と献げてゐる。訳者も亦、この訳書を自分の二人の娘に贈りたく思ふ。

昭和八年七月

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集28」岩波書店

1992（平成4）年6月17日発行

底本の親本：「にんじん 挟み込み別紙」白水社

1933（昭和8）年8月1日発行

初出：「にんじん 挟み込み別紙」白水社

1933（昭和8）年8月1日発行

入力：門田裕志

校正：Juki

2011年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「にんじん」の訳稿を終へて

岸田國士

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>